

## アフロダンスで世界とつながりたい

## Connecting with the world through Afro dance

オンウォナ アジマン 樹里亜 / Onwona Agyeman Julia

## 子どもの頃の気持ちとダンスとの出会い

私は幼い頃、あまりガーナと日本のミックスであることに誇りや魅力を感じたことがありませんでした。日本生まれ日本育ちということもあり、ガーナの文化に触れることが少なかったことが大きな要因だったのかもしれませんが。小中高生時代のほとんどはカーリーヘアに縮毛矯正をかけ、邦楽を好み、日本を出てみたいという気持ちすらあまり湧くことなく過ごしていました。週末父親によく誘われていた、ガーナ人が集まるパーティーは毎度当たり前のように断り、ミックスの子どもたちのための交流イベントにもあまり意欲的には参加していませんでした。「大切なのは人間性であり人種ではない」という気持ちが強かったため、自分のルーツにあまり興味を持つこともなかったのだと思います。

一方で、私は音楽好きな両親の影響を受け、幼い頃から音楽あふれる家庭環境で育ちました。特に楽しいと感じたのは音楽に合わせて踊ることです。私が初めて踊ったダンスはモダンバレエで、4歳の頃、母親にバレエ教室に連れていってもらったことがきっかけです。

高校ではダンス部に入り、ヒップホップダンスを踊っていました。部活では最高の仲間と出会い、毎日切磋琢磨しダンスを練習していました。

高校を卒業し大学に入ってもダンスを続けたい気持ちが強く、ダンススタジオで本格的にダンスを習い始めました。ヒップホップだけでなくさまざまなジャンルに挑戦したり、ダンスバトルに出場したりもしました。ダンススタジオに通い続けるうちに、気がつくとダンサーになりたいと思うようになっていました。

## ロサンゼルスでの経験

私を大きく変えたきっかけは、大学3年生のときにインターンシップで1ヵ月半滞在したアメリカ・ロサンゼルスです。ヒップホップダンスに打ち込むうちに、踊りの部分だけでなくヒップホップの文化や歴史にも興味を持つようになりました。ヒップホップの発祥国であるアメリカに行き、生活してみたいという気持ちから、海外でインターンシップをすることに決めました。

ロサンゼルスでは毎日発見の連続で、刺激的な日々を過ごしました。キャストイング会社でインターンシップを

し、映画、CM、ミュージックビデオなどのキャストイングを学びました。さらに、世界で最も有名なダンススタジオが職場のすぐそばにあったため、仕事終わりに毎日通うことができました。ダンススタジオでは世界的に活躍している一流ダンサーのレッスンを受け、彼らのハイレベルなダンスを間近で見ることができました。

楽しい毎日を過ごす半面、自分の中で大きな違和感を持つようになりました。それは自分のルーツであるガーナのことをあまりにも知らなさすぎる、ということでした。他の国のことを知る前に、まずは自分のルーツを学び、理解を深めたいと考えるようになりました。アメリカから帰国する際には、次に訪れる国は絶対にガーナにしようと思っていました。

## ガーナ大学への留学

ロサンゼルスでのインターンシップから1年後、留学でガーナの首都アクラに6ヵ月間滞在することになりました。中学生の頃、父と弟とガーナを訪れたことがありましたが、長期で滞在するのはこの時が初めてであり、緊張と期待でいっぱいでした。コトカ国際空港に到着し街へ出ると、燦々とした陽光、砂ぼこりや人混みなど、日本とはかけ離れた環境が私を迎えました。頭の上に売り物を乗せて歩く人や、不思議な形をした木々が印象的でした。到着後の5日間はガーナ大学の寮で父と一緒に過ごし、父が帰国した後の期間は叔父の家にお世話になりました。

叔父の家に住み始めて間もなく、ガーナ大学での留学生活が始まりました。私はガーナを中心とするアフリカの伝統舞踊や音楽を学ぶために、パフォーマンスアーツ学部舞踊研究学科を専攻しました。舞踊研究学科の授業は大きく分けてダンスとドラムの二つの授業に分類されます。ドラムの授業ではドラムの叩き方、伝統舞踊の演奏に使用される楽器の種類、ガーナ民謡の歌詞などを学びます。ガーナの民謡はシンプルなメロディーで覚えやすく、つい口ずさんでしまいます。ダンスの授業では伝統舞踊の種類や振り付けを学びます。ガーナの伝統舞踊は腰と胸を使った動きが多く、上半身中心のゆっくりとしたダンスから全身を使った激しいものまでさまざまです。ガーナの伝統舞踊の最大の特徴は、ドラムのリズム

おんうおな あじまん じゅりあ：1996年生まれ、愛知県出身。ガーナ人の父と日本人の母を持つ。現在、東京を拠点にダンサーとモデルとして活動中。アフリカンキッズクラブのダンス講師も務める。インスタグラム (@julia\_agmn) と YouTube (Sista Gold) ではダンス動画や解説動画を載せている。今後はガーナ・アクラでも活動していく予定。

ムパターンに合わせて踊りの動きを変化させていくところです。ドラムの音に耳をよく澄まし、ドラムとリンクした動きのダンスをする必要があります。

私が最も印象に残っている授業での出来事があります。それは伝統舞踊の授業中に停電が起きたときのことです。アクラでは週に数回の頻度で停電が起きます。この時はちょうど先輩達が“Gahu”（ガフ）という踊りのお手本を見せてくれていました。Gahuはエウェ民族発祥のドラムリズムに合わせて踊るガーナの伝統舞踊の一つです。伝統舞踊の授業は夜間に行われていたため、停電と同時に教室は真っ暗になりました。暗闇に包まれた教室にはドラムの音と学生のざわめきだけが響き渡っていました。しばらく動けず床に座っていると、ある学生がスマートフォンのライトをつけ、教室にわずかな光が入ると、先輩達は暗闇の中でもGahuを踊り続けていました。彼らがスマートフォンの光に照らされると、まるで舞台の上で踊っているかのように見え、とても神秘的でした。その神秘的な光景は教室にいた全員の心に響き、ざわめきが一瞬で歓声へと変わりました。暗闇で踊られるGahuを見て改めて伝統舞踊の強さと美しさに気がつき、自分のルーツを大切にしたいという気持ちがいっそう強くなりました。

## AFRIMA へのオーディション

留学生活が終盤に差し掛かっていた頃、オーディションに参加してみないかとダンサーの友達に声をかけてもらいました。それは African Union Commission (AUC) が主催している All Africa Music Awards (AFRIMA) という、アフリカで最も大きな音楽授賞式のオープニングダンサーを選出するためのオーディションでした。AFRIMAはアフリカのエンターテインメントの独自性を世界に発信することを目的としてさまざまな国で開催されており、この年は偶然にもガーナのアクラで開催されることになっていました。突如目の前に現れた大きなチャンスに驚きつつも、私は迷わず参加を決めました。

オーディションはアクラ市内にある国立劇場で行われ、100名以上のプロダンサーたちがガーナ国内外から集まりました。大規模なオーディションということもあり、選考は4日間に渡って開催されました。オーディションで最も緊張したのは、音楽を流さず無音の中で3分間踊る“アカペラ”と呼ばれる審査でした。無音の状態の人前で踊るのは初めての経験であり、とても不安でした。自分の番が回ってきて審査員の前に立つと、不思議と気持ちは落ち着き、頭の中を空っぽにして、ただ思いっきり踊りました。

3分はあっという間に過ぎて、審査員から一番初めにかけての言葉は「これまでバックダンサーやミュージックビデオには何度出演したことがあるのか？ あなたのよう人の心を動かすパワフルなダンサーに出会ったのは初めてだよ！」という言葉でした。私は「バックダンサーの経験もミュージックビデオに出演したこともありません。私は日本からアフリカのダンスを学びに来ました」と答えると彼らは驚いた後、笑顔で「このオーディションであな

たような強い意志のあるダンサーに出会えてうれしいよ」と言ってくれました。その後の審査でも自分らしく踊ることができ、無事 AFRIMA のダンサーに選ばれました。

メンバー30人が決定すると、想像を超えたハードな練習の日々が待っていました。空調が完備されていない練習場はとても暑く、鏡もなかったため自分の動きを確認することもできませんでした。それでも最高のオープニングを作ろうとみんなで必死に毎日練習し、一緒に時間を過ごしていくうちに絆も深まりました。練習期間はあっという間に過ぎ、気がつくとも本番当日でした。

会場の駐車場には大手テレビ局のトラックがたくさん並び、見覚えのある有名なアーティストたちを舞台裏で見かけたりもしてワクワクしました。パフォーマンス直前には仲間のダンサー達と声を掛け合うことでお互いの気持ちを高めました。そして本番のステージでは達成感と喜びで気持ちがいっぱいになり、踊り終わった後には自然と涙がこぼれ落ちました。

## 帰国後

ガーナでの経験を通じて、ガーナと日本のミックスであることを誇りに思うようになり、両国のミックスである自分にしかできないことをしたいという気持ちが膨らみました。日本に帰国してからは西アフリカ発祥のストリートダンスであるアフロビーツダンス（アフロダンス）を踊り、SNSやYouTubeでの発信やイベントでのパフォーマンスを行ってきました。また、アフリカンキッズクラブのダンスクラスの講師として、アフリカにルーツを持つミックスの子どもたちにアフロダンスを教える機会も定期的に持つようになりました。

今後も日本とアフリカにルーツを持つダンスアーティストとして、ダンスで人を惹きつけ、世界のより多くの人にアフロダンスの魅力を知ってもらおうことが、自分の中の最大の目標であり、使命であると感じています。



AFRIMA本番当日に仲間のダンサーと（後方右から2人目が筆者）ガーナ・アクラ 2018年11月